「水と建築」テーマ

地域の将来へ能力発揮

JIA近畿大会 JIA滋賀大会

日本建築家協会（JIA）近畿支部（井上久美支部長）は13日、「JIA近畿支部大会2018　滋賀大会」の基調講演と大会式典などを滋賀県近江八幡市で開いた。テーマは「水と建築」で、会場となった酒游館（仲屋町中6）や近江八幡まちや倶楽部（同21）には140人が集まった。菓子製造販売の、たねやグループCEOの山本昌仁氏が基調講演し、山本氏と松岡拓公雄氏（亜細亜大教授）が「地域の創造と建築家のかわり」をテーマに対談した。

今大会は、琵琶湖に通じる疎水がある水郷の文化と個性あるまちがはぐくまれてきた近江八幡市を舞台に、「水」というキーワードを起点に建築を語り合った。

冒頭、井上支部長が「大阪北部地震、そして西日本を中心に豪雨災害が発生した。もう少し建築家が地域に関わっていれば、もしかすると被害が少なかったかもしれないと感じた。復旧に向け地域の状況を知り、アクションを起こす。私達の創造性や独創性を地域に提供できれば地域がもっと良くなり、私たちの役割や存在も発信できると思う。本日のアーキサロンでは建築家の役割や未来の可能性について議論する。成果に期待している」とあいさつした。

山本氏㊧と松岡氏

続いて山本氏が「近江八幡へのおもい」をテーマに基調講演。「私たちは店舗などの建物をつくる上で、その地域にしかないものという視点を大切にしている」と述べた。

そして、同社グループの本社・旗艦店などで構成する「ラ　コリーナ近江八幡」について触れ「多くの設計者からプレゼンテーションを受けて設計者をデザイナーのミケーレ・デ・ルッキ氏（伊）に一度は決めたが、同氏は多忙で言葉の壁もあり断念した。ただそこを丘という意味の『ラ　コリーナ』と名付けてくれ監修をしてくれた」「自然に学ぶことをテーマとし、いろいろな人の話を聞くうちに藤森照信氏と出会い、ここの山、水田、城跡を見てメインショップを三つの山形で表現したプランを提案してくれた。私たちは藤森氏の作品としてやってほしいと言い、今後のこれこそが近江八幡だと100年後も語られるものをつくってほしいと求めた」「本物にするつと言うこだわりから費用はかかったが、全国・世界各国から多くの人たちが来てくれている」などと語った。

続いて山本氏と松岡拓公雄氏（亜細亜大教授）が「地域の創造と建築家のかわり」について対談。松岡雄氏が『ラ　コリーナ』について「藤森氏のファーストイメージを貫く強さがすごいし、山本さんも信念・筋を通している。なかなかできないこと」と評した上で、公共施設について意見交換し、山本氏が「公共施設は計画上の縛りが多いが、まず行ってきたいと思える環境にするべきだと思う」、松岡氏は「みんなでつくると愛着がわく。市民が計画・施工・完成後も関わることが大切」などと述べた。

松岡氏と近畿支部の6地域会の地域会長がトークセッションし、日ごろ取り組んでいる景観まちづくり活動や防災活動、漁村の再生活動などについて意見交換した。

最後に大会式典では井上支部長が「近江八幡は行政と市民によって、生活しつつ町並みを保存することを実現している。このような地域の将来のために建築家はどう関われるか。いろんな案が出た。建築家は幅広い分野で能力を発揮できる。自ら町の価値を見いだし活動する必要があると思った」、六鹿正治JIA会長も「今後とも敷地の建築にとどまることなく、敷地外にも飛び出すことが重要。私たちは地域の環境創造に貢献できる」と締めくくった。

出江潤氏と木村吉成氏に

JIA近畿 関西建築家新人賞

日本建築家協会近畿支部（JIA近畿、井上久美支部長）は13日、第12回関西建築家新人賞の受賞者を、「佐井寺のハナレ」（大阪府吹田市）を設計した出江潤氏（浅野・出江建築事務所、大阪市北区、43歳）と、「HouseA／HouseB」（京都市北区）を手掛けた木村吉成氏（木村松本建築設計事務所、京都市中京区、44歳）に決めたと発表した。

出江氏の作品は、地山が残る古い屋敷への多面体のハナレ増築と、母屋の屋根裏をゲストルームに改修したプランで構成。木村氏の作品は店舗・アトリエ・カフェ・住居の機能を配置した建築物。

出江氏㊧と木村氏

佐井寺のハナレ（写真＝笹倉洋平・笹の倉舎）

審査委員長の建築家・長坂大氏は、出江氏の作品について「建築の継承と抵抗の不思議な組み合わせが独特の空間の質を生んでいる。作者のしゅん巡が功を奏したのかもしれない。洗練された素材の扱い、そしてそれとは対比的な試み。増改築であるために空間構成に対する作者の思想を読み取ることが難しかったが、ハナレから庭、母屋の玄関まわり、そして蔵の改修状況を見て、これからのこの国の建築について議論する契機が個々にあると実感した」と高く評価。

木村氏の作品については「この賞にふさわしい総合的な力量が感じられた。未来に向けての新鮮なまなざしと、建築の本質へと向かう真摯（しんし）な精神とうれしい。日常生活を支える原初的細部と、古典的形式とのコラボレーション。図面で気になっていた2階への入り口の個性が相殺されることなく生き生きとした現実世界となった作品だ」とたたえた。

受賞した出江氏は「作品の敷地は山を区画整理した場所で、庭には山の景色が残っている。ハナレは山なりの感じをそのまま造形物として見えるようなものができるとおもしろいと考え多面体の彫刻的な形につながった」「受賞に身が引き締まる思い。より納得性のある建物をもっとつくりたいと思う」と述べた。

木村氏は「普段からより正しいものを設計しようとパートナー、スタッフと共に追求しているが、残った不安を確かめてもらうために作品を建築の賞にエントリーしている。今回、すばらしい賞に選んでいただき本当にうれしい」「私たちの現代建築と京町家の類似性、違い、継承、後身という点を審査で見ていただけた。これは私たちが建築に込めていたポイントなのでそういうことを読み取っていただけてうれしく感じた」と語った。

これまで同新人賞は毎年公募していたが、隔年募集に移行する。隔年で実施している関西建築家大賞の次年度に新人賞を募ることになった。

HouseA／HouseB（写真＝新建築写真部）